

平成 22 年度  
広島市教育センター

## 目標の明確化と指導と評価の一体化に関する研究

－指導計画とイメージマップの工夫・改善－

広島市立安西中学校教諭

松岡美香

### 研究の要約

「知識基盤社会」の時代、子どもたちに「生きる力」をはぐくむという理念はますます重要であり、確かな学力を身に付けさせるためには、指導と評価を一体化させた授業改善を図る必要がある。

そのために本研究では、目標を明確化し、評価方法を考えてから単元の指導計画を工夫した。実際の研究授業では、評価用具としてのイメージマップに活用されたキーワードの分析を通して、目標をどれだけ達成できたのかという視点で生徒の実態を把握し、次時の授業改善を図ることができた。また生徒は、イメージマップの中のキーワードを手だてとして説明文を書くことがおおむねできていた。今後の研究課題は、さらに効果的な単元の指導計画や、生徒が考えたことをまとめやすいイメージマップの工夫・改善である。

キーワード：目標の明確化、指導と評価の一体化、単元の指導計画、  
イメージマップ

## I 問題の所在

平成20年3月、学習指導要領が改訂され、「知識基盤社会」の時代に子どもたちに「生きる力」をはぐくむという理念はますます重要であるとし、子どもたちに、豊かな人間性や、健康や体力づくり、確かな学力の育成を図ることについて示された。学校教育法第30条第2項には、学力の要素として、基礎的な知識及び技能の習得、課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力、その他の能力の育成、主体的に学習に取り組む態度ということが規定されており、それぞれに基づいた観点別評価が行われている。また、今回の改訂では、授業時数が増加された。授業時数の増加は、各教科における指導事項の充実、つまづきやすい内容の確実な習得、知識・技能を活用する学習によるものであり、きめ細やかで質の高い教育を進めるための条件整備の一つである。特に活用を重視する今回の改訂では、各教科の内容に即して、思考・判断したことを言語活動を通して表現させる授業の充実が求められている。

学校の教育活動では、計画、実践、評価という一連の活動が繰り返されながら、児童生徒のよりよい成長をめざした指導が展開されている。したがって、指導と評価とは別物ではなく、評価の結果によって後の指導を改善し、さらに新しい指導の成果を再度評価し、指導の質を高める努力が必要である。目標に準拠した評価においては、児童生徒の学習の到達度を適切に評価し、その評価を指導に生かすという、PDCAサイクルが働くことが必要である。

所属校である安西中学校の学校教育目標は、「心身ともに健やかで想像力豊かな生徒の育成」である。学校努力目標として、「活用力を育てるための授業づくり」を掲げ、研究を進めてきた。しかしながら、評価の研究と、生徒への具体的な手だてについての研修がなかなか進んでいなかったと考える。自分自身のこれまでの実践を振り返ると、指導と評価の一体化において、PDCAサイク

ルを機能させるためには、評価することが大切であるにもかかわらず、普段の授業の中で、このチェック機能が働いていなかった。

今回の学習指導要領の改訂のポイントや、安西中学校の期待する生徒像において、確かな学力を身に付けさせるにはどうしたらよいのか、また、評価を生かした授業改善とはどういうことなのかについて考える中で、今回の研究に至った。

## II 研究の目的

社会科の目標を明確化し、指導と評価が一体化した単元の学習指導計画の作成と、イメージマップを活用した評価方法を位置付け、授業改善を行い、子どもたちの確かな学力に結びつく指導方法を考察する。

## III 研究の方法

- 1 研究主題に関する基礎的研究
- 2 目標の明確化と指導と評価が一体化した単元の指導計画の作成
- 3 イメージマップの活用
- 4 研究授業の実施
- 5 研究の分析・評価

## IV 研究の内容

### 1 研究主題に関する基礎的研究

学習指導要領の目標に準拠した評価は、指導の前に目標を明確にして、それによって子どもたちの実態を捉え、指導の改善を図ることが重要だとしている。梶田氏も、評価をして目標としてきたもの（教師の「願い」や「ねらい」）の実現状況を確認するためには、目標そのものが明確化されなくてはならないし、また、そこでの評価結果をこれこれの目標の実現状況としてみる、といった

評価方法が準備されなくてはならない<sup>1)</sup>と述べている。目標を明確化することが、授業を振り返らせ、授業改善につながり、また、次時の授業での子どもたちの補充や進化の手だてを準備することができる。子どもたち自身も、本時のねらいに対する自身の学習を自己評価し、振り返りを行うことによって、主体的な学習に結びつく<sup>2)</sup>と考える。

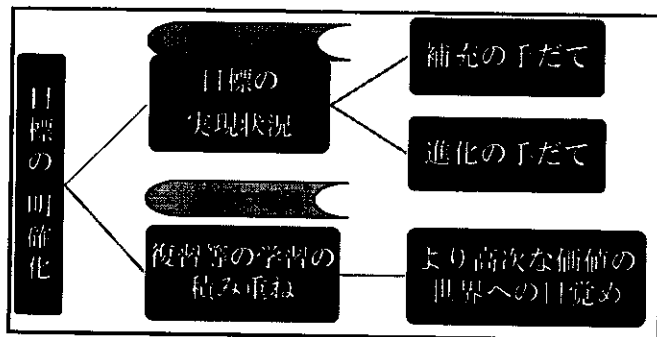


図1 目標の明確化と評価

しかしながら西岡氏によると、目標と評価規準の研究は進んではいるが、目標に対応した評価方法の開発については十分ではないとしている。というのは、目標分析による学力評価計画を立てて緻密に指導されてはいるものの、あまりに過剰に細分化すれば、実行可能性の点で問題が生じたり、細分化しすぎた評価規準で本当にめざしている学力を評価できているのだろうかという妥当性の点でも疑問が生じるという。

そこで西岡氏は、求められている結果、承認できる証拠、学習経験と指導を三位一体のものとして計画する「逆向き設計論」を提唱している。指導の前に評価を計画する点、そして学年末や卒業時、あるいは大人になってからといった、修了時、終了後の子どもたちの姿を想定しつつ、そこからさかのぼってどんな力を身に付けさせる必要があるのかを考える点が特徴である。<sup>3)</sup>

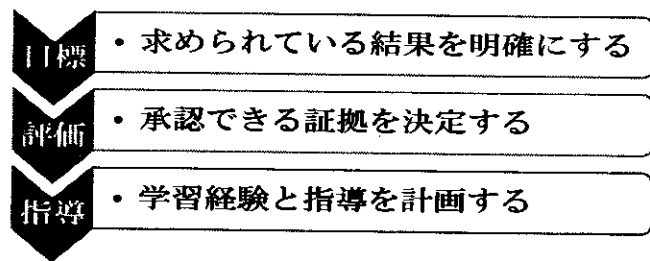


図2 西岡可名恵氏の「逆向き設計」論

佐藤氏は、評価資料の作成と活用<sup>4)</sup>の考え方、進め方についての評価規準の作成は、評価方法の工夫・改善の一体化であり、評価方法の工夫・改善は、「評価資料の作成・活用」によって実践化されるという。<sup>3)</sup>したがって、評価方法の具体的な手だてとしては、目標に対応した評価が可能な「評価用具」を選択し、適切な評価場面を設定して実施することであり、「評価用具」が、教師の授業改善と、生徒の継続的な学習を支える。「評価用具」としては、ペーパーテスト、実技テスト、レポート、ノート、ワークシートなどが考えられるが、目標と指導と評価の関係において客観的に評価可能な評価資料になり得るものでなければならない。



図3 評価の一体化

社会科における評価は基本的には、その単元の目標に対する達成度で示される。学習指導案の設計の際には、単元目標及び本時の目標が必ず記入されている。岩田氏は、目標は評価視点の裏返しという考え方を明確にし、さらに目標記述の明示性があってはじめて、内容・方法を規定し、授業分析及び評価の規準にもなり得る<sup>4)</sup>ことを述べている。また、子どもが単元の題材について、どのような社会認識や関心をもっているのかを評価

<sup>1)</sup> 梶田 叡一『実践教育評価事典』文溪堂、平成22年、22頁

<sup>2)</sup> 西岡可名恵「教育課程部会 学習評価の在り方に関するワーキンググループ 第3回議事録」文科省HP

<sup>3)</sup> 佐藤真『「評価資料の作成・活用」を実践から学ぶ』教育開発研究所、2004年、4頁

<sup>4)</sup> 岩田一彦『社会科授業研究の理論』明治図書、1994年、114頁

する有効な方法として、絵や説明文の評価があるとしており、絵や説明文の評価をクラス全体の傾向性として把握すれば、授業内容の評価につながるができる。さらに、「わかる」ということを学習目標とする際には、学習目標が説明的知識で書かれることが必要である。<sup>5)</sup>したがって、目標記述は以下の条件をもっていることが必要であり、目標の明確化と指導と評価が一体化した単元の学習指導計画の作成と、イメージマップを活用した評価方法を位置付け、授業改善を図る。

- 目標記述が内容の規定性をもっているか。
- 目標記述が社会事象間の関係性を明示する形で書かれているか。
- 目標記述が原因・結果の関係で書かれているか。

図4 岩田一彦氏の「目標の記述の条件」

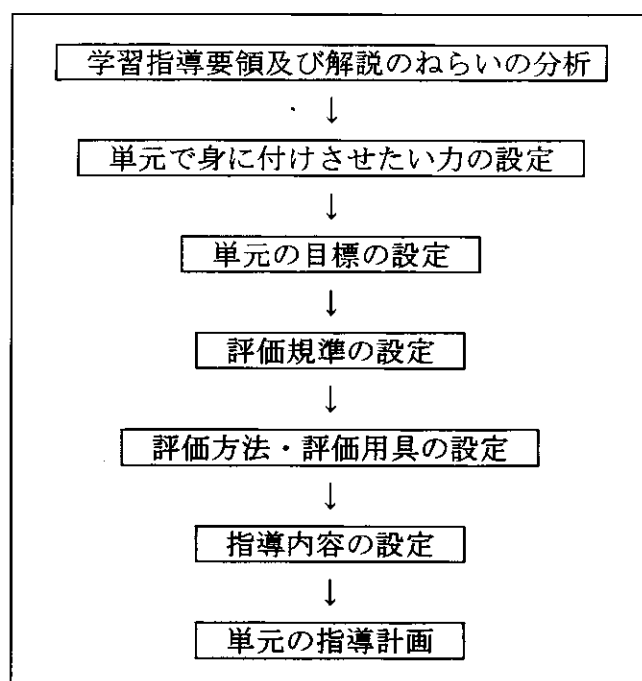


図5 目標を明確化した指導計画の構想

## 2 目標と指導と評価が一体化した単元の指導計画の作成

目標は評価の視点の裏返しという考えから、目標を明確化し、評価規準となる評価方法つまりは、評価資料となるイメージマップを評価用具に設定し、目標を達成させるための問いを結びつけた単元の指導計画を開発する。各授業展開では、付けさせたい力を明確にし、すでに習得している基礎的な知識・概念・技能を活用して、社会事象や問題に対する「どのような～なのか」「～であるのはなぜか」という問いを組み込み、生徒が「社会を知る」「社会をわかる」ということを実感させることができるようにする。目標が明確であれば、付けさせたい力も明示され、評価方法としての評価用具が決定すれば、指導である問いも決定する。この目標と指導と評価が一体化すれば、ぶれのない授業によって単元全体を見通し、目標に到達したかどうか、形成的評価を行って、教師の授業改善ができると思った。

## 3 イメージマップの活用

生徒の確かな学力を伸ばしていくために、生徒がどのように考えているのか、その思考過程を見取ることができるイメージマップを評価用具として取り入れた。イメージマップは授業中・授業後の形成的評価となり得るものである。イメージマップにおけるキーワードのつながりや説明文について、学習した社会的事象を正しく認識しているかどうかを見取り、次時での授業改善につなげる。また、教師だけでなく生徒自身も自分の学習状況を把握できるイメージマップを作成することで効果的に自己評価し、以後の学習に生かしていく。具体的に授業の中では、生徒に使ってほしいキーワードをフラッシュカードで黒板に示しておき、そのキーワードについて思考・判断したことを生徒がイメージマップで整理し、それをもとに説明文を書くという活動を毎時間、授業のまとめとして取り入れる。全授業でイメージマップを活用することにより、生徒の関心・意欲を保ち続けさせ、主体的な学習にもつなげたいと考える。

<sup>5)</sup>岩田一彦『社会科固有の授業理論・30の提言』明治図書、2001年、99頁、151頁

#### 4 研究授業の実施

- (1) 日 時 平成22年12月6日～12月13日  
 (2) 場 所 広島市立A中学校  
 (3) 対 象 第2学年 2クラス(A組・B組)  
 (4) 単元名 地理的分野「世界と日本の人口」  
 (5) 単元の目標
- 世界的視野で見ると、日本は人口の集中している国の一つであるが、日本国内の人口分布図を見ると、世界と同じように不均衡であることがわかる。
  - 世界の人口が増加し、環境問題等、様々な人口問題が起きているが、日本では世界でも類を見ない早さで少子・高齢化が進み私たちの暮らしに影響を及ぼしていることを考察する。
  - 平野部の大都市に人口が集中する一方で山間部では集落もまばらになり、過疎化や少子・高齢化が進んでいることがわかる。

#### 5 研究の分析・評価

##### (1) 成果

目標を明確化し、指導と評価を一体化させると授業の学習方法も決定し、目標をどれだけ達成できたのか、生徒の実態を把握して次時の授業改善を図ることが可能であった。図6は、ある生徒のイメージマップの第1時から第4時までの変容である。第1時では、人口問題は環境問題であると捉えているが、自然をイメージしたキーワードばかり広がり、中核となるキーワードが見られなかった。この生徒にはイメージマップの書き方について、授業のキーワードを使ってみるように伝えたところ、第2時で改善することができた。しかし、少子・高齢化を対比させてイメージマップを書いており、少子化と高齢化の関連が間違っ

てしまっている。第4時のまとめでは、これまでの関連を整理し直し、中核となるキーワードを使って説明文を書くことができた。中学校では次時の改善はもちろんであるが、複数クラスで授業を展開していれば、本時を改善したものを他のクラスの授業にも生かすことができる。今回の検証授業は4時間の小単元であったため、十分に改善できたとはいえないところもあるが、前時間の評価から改善することができ、より大きな単元では、改善もしやすいのではないかと考える。

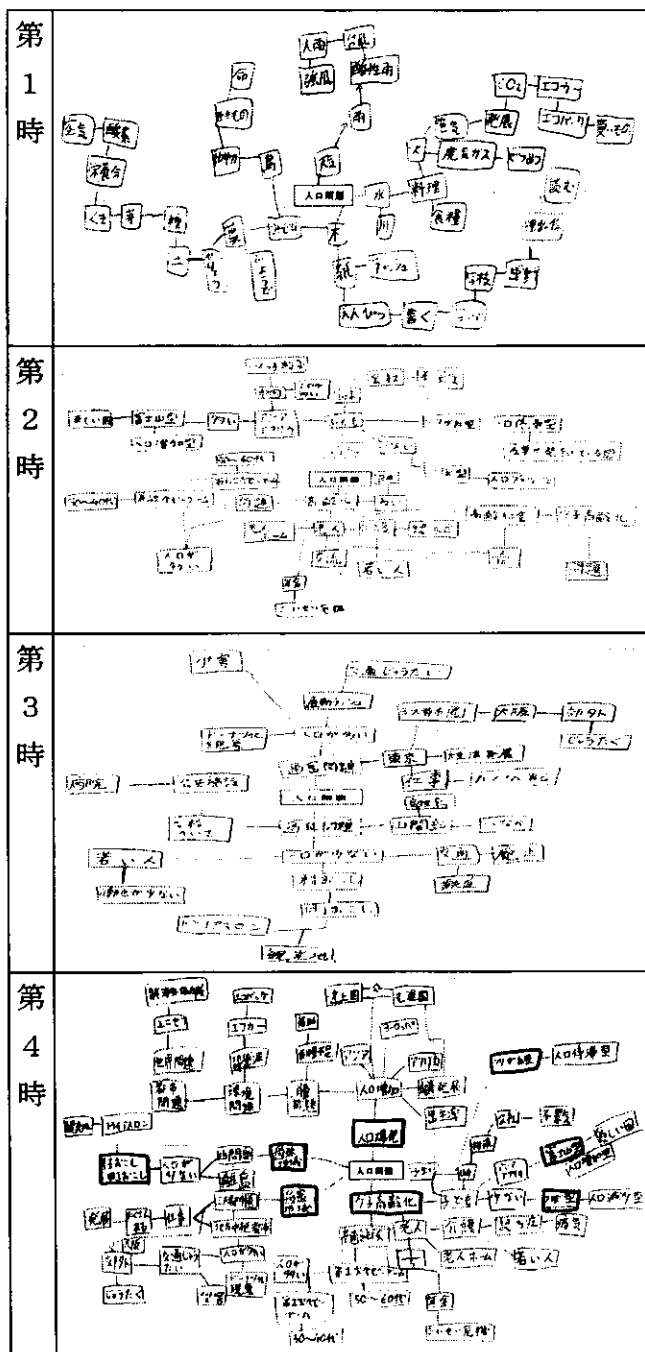


図6 生徒のイメージマップ

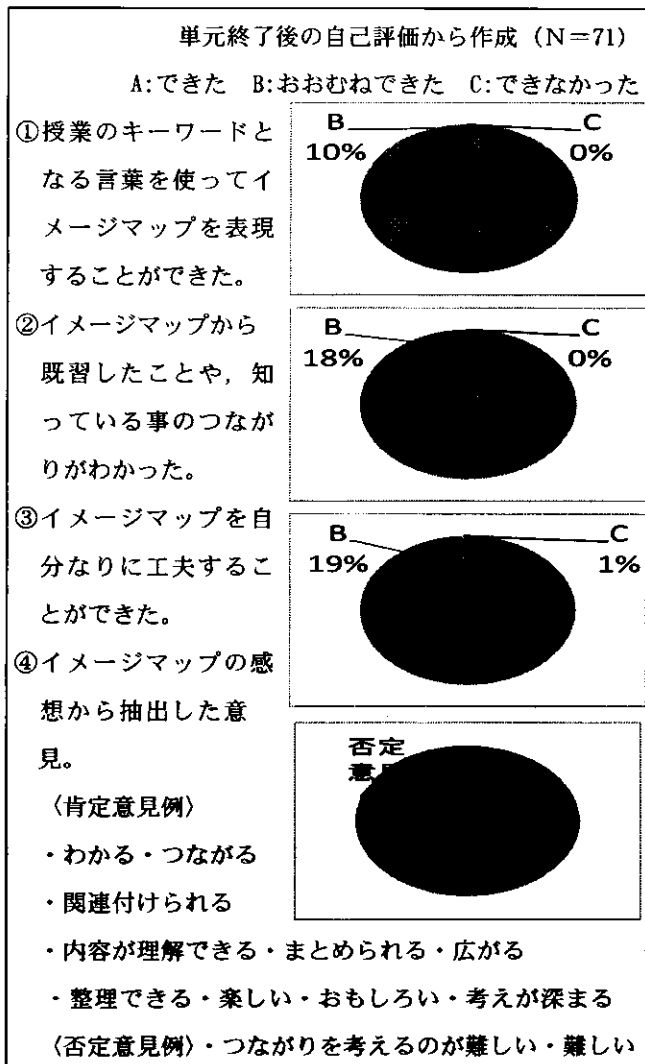


図7 イメージマップの自己評価

授業中では、自分がわかったことや考えたことを単語でとりあえず出すことが容易だったようで、日頃から表現することが苦手だと考える生徒も、前向きに取り組むことができた。また、多くの生徒が自分と周囲の生徒のイメージマップとを比較しながら、どうしてそのように関連付けたのかを話し合っている姿も見られ、イメージマップに対する肯定的な意見が多いということがわかった(図7)。また、イメージマップのキーワードが増えていくことによって、その広がりから自己評価をしつつ、生徒の学習意欲にもつながったと考える。第4時のまとめにおいては、生徒自身がこれまでのイメージマップマップを整理し直し、説明文を書くための手だてとして、イメージマップのキーワードを活用することができている。そし

て、イメージマップを活用した方が説明文を書きやすいとした生徒は、イメージマップを手だてとしない生徒に比べて、着実にそのキーワードを活用し、説明文に反映させていることがわかった(図8)。

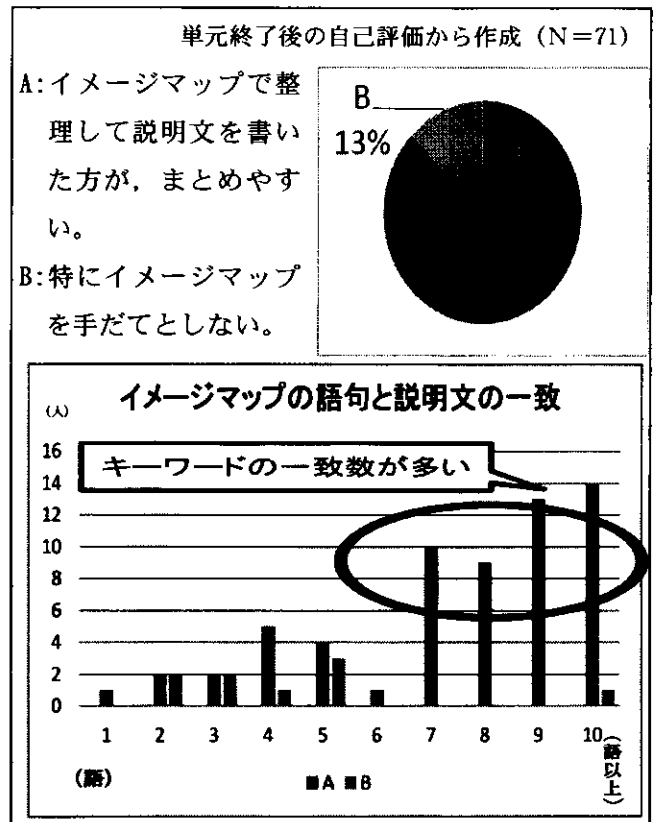


図8 イメージマップの語句と説明文の一致

## (2) 課題

目標を明確化し、指導と評価が一体化された単元の指導計画について、学習内容や学習方法がわかりやすく使いやすいものにするために、目標と指導と評価がどのように結びついているのか、また、授業時間の中で生徒に発見してほしい課題に関する語句を四角で囲み、視覚的にわかりやすく工夫し、評価方法をさらに具体的にするために、イメージマップでどのように読み取っていけばよいのかを示しながら指導計画の改善を行っている(図9)。しかし観点の見取りについて、1時間に1観点を原則に、全ての観点を網羅するように作成しているが、4観点はそれぞれ絡まり合ながら育成されるものであるから、思考力・判断力・表現力を中心に見取ることができる指導計画と

目標	指導	評価		
本時の目標	中心課題	評価標準		
①世界の人口分布には偏りがあり、人口増加によって人々の生活に影響があることがわかる。	「人口が増加すると、どのような問題があるのか調べてみよう。」	世界の人口分布は不均等であり、人口増加による問題が生じていることを理解する。	関:意:技:知 ○:◎	世界の各国で、人口密度の高い地域では、都市問題などが起こっており、さらに、近年の人口爆発によって、世界人口は急増し、環境問題等につながっていることがイメージマップに表れている。
②人口ピラミッドの特徴を認識し、世界と比べると日本は少子高齢化が進んでいることにより様々な問題に直面していることに気づく。	「人口ピラミッドからどのような特徴があるのか調べてみよう。」	人口ピラミッドから、日本の少子高齢化が進んでいることと人口構成をよみとることができる。	◎:○	人口ピラミッドの3つの型の特徴と、日本の少子高齢化と、少子高齢化の影響についてイメージマップに表れている。
③日本の人口分布には偏りがあり、平野部の大都市に人口が集中する一方で、山間部では過疎化や少子化、高齢化が進み、それに対する様々な人々の努力があることがわかる。	「過疎・過密地域の人々は、どのような対策を行っているのだろうか。」	日本の過疎過密の問題と、それに対する人々の努力についてまとめることができる。	◎:○	過疎過密地域の分布や人口構成の特徴を捉え、具体的な対策や問題と結びつけたことがイメージマップに表れている。
④世界と日本の人口問題について説明し、自分の生活に関わりについて考察する。	「世界と日本の人口問題について自分の考えをまとめ、説明しよう。」	世界と日本の人口問題が、私たちの生活にも影響していることを理解することができる。	○:◎	世界と日本の人口問題について人口増加と人口減少の視点から社会事象の関係を認識し、私たちの生活にも影響していることや、解決方法について、イメージマップや説明文で表現することができる。

して

図9 目標の明確化と指導と評価の一体化を図った単元の指導計画

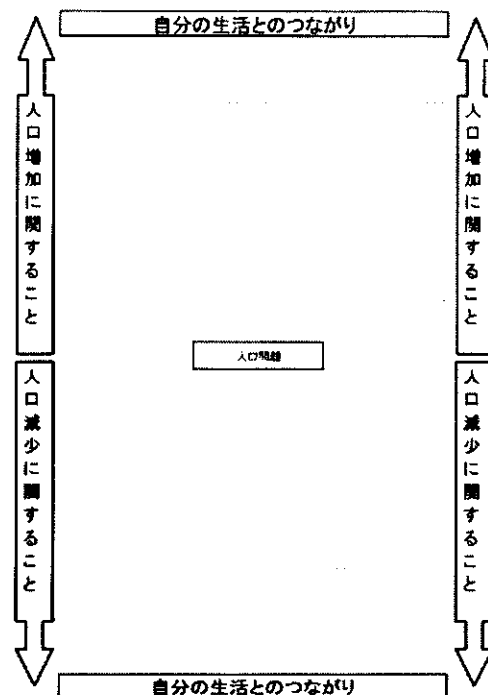


図10 キーワードの方向性を示したイメージマップ

改善することもできると考える。また、評価用具であるイメージマップは、工夫することによって、生徒の力をさらに引き延ばすということが考えられる。今回の実践授業では、授業で学んだキーワードを使い、生徒の自主性に任せてイメージマップを作成させたが、知識の定着を図るためには、イメージマップの空間配置において、キーワードの方向性を示しておく方法（図10）を用い、さらに、生徒にとって切実な課題となる、自分の生き方や生活に関連付けられるような工夫が必要である。また、生徒にとってもわかりやすい評価規準を具体的に示すことで、イメージマップのキーワードの広がりから自己評価をしたり、生徒同士が形成的評価をしたりする、生徒たちが主体的に学ぶ活動の手だてとして、これからも意欲的に取り入れていきたい。

## V 研究のまとめ

本研究では目標を明確にし、生徒に付けさせた

い力を具体的に考えることで、指導と評価の一体化を図ることができた。また、学習指導要領の改訂で注目される思考力・判断力・表現力について、イメージマップは、文章表現の手だてとして有効である。今回初めて、イメージマップという評価用具を位置付けた授業を行ったが、生徒の中には、テスト勉強の時や、歴史の時間にも使ってみたいと、継続を求める感想も多かった。今後、生徒にもわかりやすい評価規準の提示の仕方と併せて今後の研究課題としていきたいと考える。

### 参考文献

- ① 文部科学省『中学校学習指導要領解説社会編』日本文教出版、2008
- ② 西岡可名恵『「逆向き設計」で確かな学力を保証する』明治図書、2008
- ③ 西岡可名恵・田中耕治『「活用する力」を育てる授業と評価・中学校』学事出版、200
- ④ 小原友行『「思考力・判断力・表現力」を付ける社会科授業デザイン中学校編』明治図書、2009